

Title	ダイモニオンの警告 : ニーチェとその父
Author(s)	須藤, 訓任
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 43 P.1-P.17
Issue Date	2009-12-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/12463
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ダイモニオンの警告——ニーチェとその父

須藤 訓任

フリードリヒ・ニーチェは生後四歳九ヶ月のとき、父カール・ルドヴィヒを亡くした。そのことが彼の人格形成や思想形成にどのような影響を与えたか——ドイツにおいてはとくに一九九〇年前後以降ニーチェ思想に伝記的な角度から切り込むことが一つのトレンドとなり、未公開の一次資料も含めて詳細な資料検討をふまえた研究成果が陸續と発表されている。それも、幼年期少年期のニーチェに焦点を当てたものが多い。そこには従来知られていなかった知見が数多く盛られており、亡父との関係の研究もその例外ではない。小文もある面からすれば、この伝記的研究のトレンドに棹さすが、新たな資料の発掘などは望むべくもない。本稿の意図はあくまで、ニーチェ自身の残したテキストに基づきながら、思想家ニーチェが模索する父—息子関係の形姿の有為転変をスケッチすることに尽きる。思想家なるがゆえの父—子関係の課題をニーチェの思想的営為は映し出している。人は誰しも両親の子供であり、また多かれ少なかれ思想家である。そうである以上、ニーチェが苦闘した（亡き）父との関係もある種の普遍性を有しているだろう。

1 ニーチェには現実の父と関わる時間はわずかしか与えられなかった。それだけに、父の「影響」は、巨大な「影」

(クロソウスキー) となつて、息子フリードリヒを覆うこととなつた。幼少の頃の喪失ゆえに、また母をはじめとする周りの家族からも促されて、息子はともすれば父を理想化し、その崇敬心を父の一身に向けて発動させる一方で、「脳軟化症」が死因とされる父からの「遺伝」の波及効果にも内心怯えていただろう。そこには、若くして領邦君主の子女の家庭教師に抜擢され、のちレッケンという比較的小さな町にありながらプロテスタントの教区の教会付き牧師として活躍した、まぎれもなく知識階層の一員であつた父との同一化が大きな要因として働いていた。息子もまた幼くして知的才能の優秀さに関して衆目の一致するところであつたし、それだけに家族はフリードリヒが父の跡を継いで聖職者の道を歩むことを当然のように期待し、また息子の方も父の生前からはやその書齋に入り込んで傍らで書物を好んで眺めていたのであつた。若い頃からピアノの即興演奏を得意とした息子であつたが、それには父もまた熟達していた。息子が父と同一化する機縁はたつぷりそろつていた。極言するなら、ニーチェの一生は父との同一化をめぐる格闘であつた。

とはいえ、ニーチェの残した文章のうち父カール・ルドヴィヒに対する言及はそれほど多いわけではない。言及のほとんどすべては自伝的な文章に見られる。ニーチェの自伝といえば、最晩年の『この人を見よ』（一八八八年秋執筆）がなにより有名であるが、それ以外にも若年時の一四歳から二十歳過ぎまで彼は何種類もの「自伝」を残している。「わが生涯より」と題された一四歳時のものなど、全集版で三〇頁に及び、執筆年齢を考えるなら、かなりの大作と言つてよい。これらの「自伝」で父の死（一八四九年七月三〇日）（とその半年後の一八五〇年一月九日の弟の死）が自分のその後を変えた人生の一大事として描かれているのは、何ら不思議なことではない。しかし、思想家としての生涯を開始した二〇代半ば以降ニーチェは、まるで示し合わせたかのように、自伝の筆を折

る。^②

二四歳の若さでバーゼル大学の員外教授となつて以来、上述の『この人を見よ』の執筆まで、およそ二〇年間ニーチェは父について——書簡を別とするなら——ほぼ完璧に沈黙を守る。それだけに、(公刊著作ではなく)遺稿ノートではほんの数回であるにせよ、言及される父の姿は注目されてよいだろう。本稿が考察を集中するのも主としてこの遺稿断片である。一八七五年夏に執筆時期が推定されている遺稿ノートでニーチェは次のような文言を書き残している。(IV, II[II])

ニムスドルフにいたときの私、黄金草原での私の様子と来たら一月はのほりぬ。プラウエンの小川のほとり、春の蝶たちのもと。幼年期の喪失を泣いたポープレス。色とりどりの蝸牛を見つけたレッケン。方解石と石膏を掘り出したナウムブルク近く。誰もいない野原に秋がやってきたプフォルタ。祖父がヘルティの「なんと幸せな男」を説明してくれたときのこと。ボン近郊でヴィート川(?)がライン川に注ぎ込むところで、幼年時代の感情が今一度私に襲ってきた。それからノイガッセにて。そこで私は常々父の警告の声を聴いていた。——ホーホハイム牧師の家政婦が話してくれた物語。クルメ・フーフエでは月明かりの中スケートをしながら、「わが辻琴の一日の稼ぎぶち」。——ラヴァヤック。

引用文中カタカナで記された固有名については白水社版全集の注解などを参照いただくとして、^③総括的なことだけを一言するなら、挙げられた項目はいずれも何らかの形で幸福な幼年時代の一駒(ないしその再来(ボン近郊の話))と関連する。例えば、最初の「ニムスドルフ」。そこは父の異母兄弟が牧師をしていた場所であり、上述の一

四歳時の自伝でニーチェはつとに、ニムスドルフに滞在した際、「晩に月が僕のベッドを照らし、目の前で黄金草原が銀色の輝きを放ち、そうするとアウグステ叔母さんが「月はのほりぬ／黄金色の星がきらめきわたる」などと語ったのを、覚えている」と記し、「ああ、このときのことを僕は決して忘れないだろう」(J. S. 235)と心情を吐露している。

そうはいっても、引用された断片は他方で、幼年時代の喪失に涙するなどいわれているからには、単純に忘れられない至福の一駒たちの記録ではない。幼年時代の喪失の自覚は七歳のときのことであった。『この人を見よ』では、そのことは「馬鹿げているほど早い時期、七歳のとき、わたしはすでに、人間の言葉が決してわたしのもとには届かないことを知っていた」(VI. S. 235)と説明されている。七歳時とは単純に計算すれば、一八五一年から五二年にかけてのことである。その前年の一八五〇年の春ニーチェは家族(母、妹、父方の祖母と二人のおば)ともども生まれ故郷のレツケンからナウムブルクに移住し、当地の学校に通い始めていた。級友との関係が幼年時代喪失の自覚の一因となったことは想像にかたくない。級友からは「小さな牧師さん」とのあだ名を献上され、下校時驟雨に襲われても、校則違反になるからといって、走ることなくずぶ濡れになりながらゆつくり歩いて帰ったニーチェである。

幼年時代の喪失を泣いた場所の「ポープレス」とは母方の祖父母の居住地である。この祖父は父と同じく牧師であり、ヘルティの詩「なんと幸せな男」の説明をしてくれたのも同じ祖父のだが、妹エリーザベトによると、その「祖父エーラーは、最年長の孫であるフリードリヒの並はずれた天分を最初に認めた人であった。」息子が他人に打ち解けないと嘆くわが娘にこの祖父はきつい口調で諭した。「しかし、お前、お前はあの子がもっているもの

を全然判つとらんじやないか！あれは、わしがこれまでの人生で見たいちばんただならぬ、いちばん天分のある子だぞ。わしの六人の息子を全部合わせても、お前のフリッツほどの天分は持つとらん。いいからあの子を独自なままにさせておけ！」（浅井真男監訳 E・ニーチェ『若きニーチェ』、河出書房新社、一九八三、三八頁）

ニーチェもまた幼くして「選ばれてあることの恍惚と不安」の意識を抱えていたであろうことを窺わせるエピソードである。周りの人々や社会からの隔絶の意識——これが「幼年時代の喪失」の自覚の内実にはかならなかった。だから逆に、幼年時代の幸福も、その喪失が自覚されないことには、それとして認定されない。こうして改めて、最初の引用文を見返してみると、そこに列挙されている想い出は大方、七歳以降のものであるらしいことが目につく。幼年時代喪失の自覚以前の出来事である可能性が高いのは、レッケンでの蝸牛の発見くらいである。そして、幼年期の喪失が周りの者たちとの疎隔の意識だとしたら、幼年期（の幸福）それ自体は人々や世界そのものへの没入や一体化の感覚、とくに自然との無邪気な交歓の経験であろう。蝸牛の発見や方解石の発掘、月明かりの中のスケートなどはまさにそうした事例であろう。実際、引用文の三年後の一八七八年春から夏にかけて執筆された「回想 Memorabilia」と題された遺稿ノートの一節には、「太古の証人としての石」と「クルメ・フーフエ」での「スケート」のことが「人生の幸福な日々」として挙げられている。（V₃, 28[6]）

だが、世界や自然へのこの同化の感覚はあくまで、人間世界からの疎隔の自覚を前提とし、（たとえ出来事自体はこの自覚以前のことだとしても）この自覚の背景のもとで明滅するものなのだ。そのことはとくに、「誰もいない野原に秋がやってきたプフォルタ」に関して顕著である。プフォルタは言うまでもなく、一八五八年秋ニーチェが入学した当時の寮制の名門校の所在地である。したがって、この「秋」はニーチェ一四歳以降のことであるが、

これは一八七八年の「回想」ではおそらく、次の文章に該当するものだと思う。

秋——痛み——切り株——虫取りナデシコ、ユーゼンギク。これはルーヴルの火災の誤報のときとよく似ている——文化の秋の感覚。これ以上深い痛みはない。(Ibid., 811) (ルーヴルの火災の誤報とはバリコミュエーション時の混乱によるが、この誤報に基づいてニーチェとブルクハルトが手を取り合って涙したという、「伝説」は有名である。)

いわば世界の「秋」。価値あるものの崩壊と凋落。価値の喪失が痛感されるがゆえに、価値そのものも際立つ。価値とは今の場合幼年期であり、幼年期における世界との一体化の感覚にほかならない。「回想」はこの「文化の秋の感覚」に関する断章から開始されているが、そのことの意義を見逃してはなるまい。本稿のテーマである父との関係も、すなわち、引用文にあった「常々父の警告の声を聴いていた」「ノイガッセ」も、一旦この文脈のもとに置き入れなければならない。

ノイガッセとは一八五〇年にレッケンから引越したナウムブルクの住居があった街の名前である。そこに一家は一八五六年父方の祖母のエルトムーテが死去する(その前年、上掲のニムスドルフ滞在に関連して言及されていた病弱の叔母アウグステがすでに亡くなっていた)まで住んでいた。ということは、その地で最大限六年間ニーチェは「父の警告の声を聴いていた」ことになり、それも例の幼年期喪失の自覚後その声を聴いていた可能性が高い。この「父の警告の声」とは何なのか。父は一八四九年の夏死んでいるのだから、そしてそれが(その半年後の弟ヨージェフの突然の死とも相まって)ナウムブルクへの引越しの最大の要因となっているのだから、この「警告

の声」は生身の父の声ではありえない。だとすれば、たとえば父の叱責の声の想起なのだろうか。あるいは何らかの幻聴の類いだろうか。確定的なことは言えない。確定性の欠如といえば、「父の警告」の中身も同様である。ニーチェ自身何もそれについては語らない。いやむしろ、警告の何に對してということ、少なくとも引用執筆時期のニーチェにとってはどうでもよいことなのであって、ただ「父」とは「警告の声」であるというそのことだけで十分であったのだろうか。まず、この「警告の声」の聴取が、幼年時代の幸福やその喪失といかなる関係にあるのかを、確認しておきたい。

注目すべきは、「父の警告の声」への言及が、ボン近郊での川の合流点での幼年期の感情の再来に続けて記されていることである。それも、「それから Dam」 という接続詞によって繋がられている。いったい何が「それから、ノイガッセにて」というのだろうか。ごく素直に、文法的に文章の繋がりを読むなら、「幼年時代の感情」が「それから、ノイガッセにて」「私に襲ってき「てい」た」と理解されよう。興味深いことに、七八年の「回想」においてもこれら、合流点でのことと父の警告の二つは続けて記されている。

88] 七歳——幼年時代の喪失の感受。しかし、二〇歳のときボン近郊でリッペ川(?)の合流点で自分を子供だと感じた。/ 89] ダイモニオン——父の諫める声 (Ibid., 88], [9]) 「リッペ川」とは正確には上にあったように「ヴァイト川」である。

そうであるからには、「父の警告の声」の聴取とはニーチェにとって、幼年期の幸福の再現であり回復であることになろう。それは、レッケンからナウムブルクへの引越(一八五〇年)がニーチェにとって、きわめてシヨツ

キングで悲しい出来事として少なくとも当初は感じ取られていたことを勘案するなら、必ずしも理解困難なことではない。引越しは息子フリードリヒにとつては最愛の父と共有した想い出を奪われる、文字通りの故郷喪失の体験であったからである。そうであった以上、父の声の聴取とはいかなる形であれ、息子からするなら、今は亡き父や故郷との繋がりの（一時的で幻想的な）回復を意味したに違いない。ただ、その父の声が「警告」や「諫め」の声であったからには、声の聴取の時点ですでに息子が、世界との素朴な一体化の「幼年期」から逸脱した危ういところに位置してしまっていることを示唆する。その意味で、「父の警告の声」の度重なる聴取とは、幼年期の幸福とそれの喪失を一身に集約し、その幸福⇨喪失を機会あることに、それこそ「警告」する事件であった。

だが、ニーチェはなぜ三〇代前半から中盤になって、「父の警告の声」のことを想起するのか。それも、想起の時点が二五年夏であり一八七八年春―夏であったということには、何か理由が認められるのであろうか。まず、最初に挙げた引用文〔K:III〕が遺稿ノートに記されている場所に注目したい。というのも、それはやや奇妙な箇所に記入されているからである。〔K:III〕のノートは（翌年一八七六年七月刊行の）『反時代的考察』第四篇「バイロイトのリヒャルト・ヴァーグナー」の「下準備」と題され、ほとんど全編がそのための覚え書きや草案で埋め尽くされている中、件の幼年期の追想だけが一つだけ異物のように挿入されている。これはずいぶん場違いな文脈のように思われる。

「バイロイトのリヒャルト・ヴァーグナー」は表面上のヴァーグナー賛美の背後で辛辣な批判の矢を潜ませている書物として知られている。実際、それはある意味で後年のヴァーグナーに対する論難を事実上開始した書物でもある。今問題となっている遺稿ノートでも、幼年期に関する引用文の直前に「ヴァーグナーには危険な志向がいく

つもある」として「無節操」「奢侈や贅沢への志向」「嫉妬深さ」「何事も理解する如才のなさ」「欺瞞の手練手管」「恒常的な自己正当化」といった点が挙げられている (Ibid., II[6])。これはニーチェによる明確なヴァーグナー批判としては、最初期のものに属する。遅くとも一八七五年夏以降、ニーチェはかつて「天才」として崇めた芸術家ヴァーグナーの問題性をはっきりと認識するようになった。よりにもよってそうした時期に、幼年期の幸福と喪失の想い出が突如として再来した。

さらに話を継ぐならば、同じく幼年期のことなどを記した遺稿ノート「回想」の執筆は一八七八年春―夏であったが、その年の初めにはヴァーグナーから『バルシファル』の台本を贈呈され、同年四月には逆にニーチェからヴァーグナーに『人間的、あまりに人間的』が献本されて、両者の修復不可能なまでの思想的亀裂が明白となったのであった。そして、この『人間的』の執筆が事実上開始されたのは一八七五年の夏であったと言われる。要するに、「父の警告」を含む二度にわたる幼年期の想起は間に『人間的』の執筆期間をちょうどすっぽり挟みこんでいる。それはまた、ニーチェの側からするなら、ヴァーグナーへの疑念が明瞭に意識化されてついには決定的決裂へと至る期間でもあった。この間の事情を、もう少し追跡してみよう。

一八七五年夏バイロイトでは翌年に控えた音楽祭の創設のための準備の一環として、ヴァーグナーの『ニーベルングの指輪』の試演が行われ、ニーチェもそれに当然出席するものとヴァーグナーたちからは期待されていたが、体調が思わしくなく、参加を断念し、療養を余儀なくされる。遺稿ノート「V」¹はまさにこの時期に執筆された可能性が高い。七月一七日、前日からシユタイナバートという町で療養生活に入ったニーチェは、ヴァーグナー夫人コジマからの書簡で、カラメルやら果物やらを送ってほしいという注文を受けるのだが、対応困難な事情にあっ

たために、当時親交のあつたマリー・バウムガルトナーにその注文を回す。その際は彼は、ヴァーグナーの子供たち、特に当時六歳の長男ジークフリートのために、自分からのプレゼントとして「すてきなナツメヤシ」を送ってほしいという願いを託す（七月一九日付、M・バウムガルトナー宛書簡）。この子供へのプレゼントが自分の幼年時代の甘美な駒々への喪失の痛みを伴った連想を呼び、それがヴァーグナー論執筆の最中に例の引用文をメモさせた可能性もある。

一方一八七八年の「回想」の方は、幼年期の思い出だけでなく、近々の出来事などに関する言及も多いのだが、それがいかなる機縁で執筆されたのかは不明である。^④『人間の』の完成によつて、ヴァーグナーとの関係にも一つの区切りがついたとの思いが、すなわち人生の一つの節目を越えたとの思いが、それまでの「回想」の数々を喚起したのかもしれない。実際、その書に対するヴァーグナーたちの反応は厳しいものであつた。同年五月三一日ニーチェはケーゼリッツ宛に書いている。「バイロイトからそれ『人間の』は一種の追放処分を下されています。しかも、同時にその著者に対しても大々的な破門が布告されたようです。」

「回想」の数々は二五年の文章以上に断片的な性格が強く、まるでニーチェの生の肉の奥ふかくに多数ちりばめられた痛がゆい棘の疼きといった趣がある。ともあれ一八七五年がワグナーとの訣別のきざしだとすれば、一八七八年はその（一応の）完了である。そして、ヴァーグナーからのこの離反が、ニーチェの亡父への関係をも大転換させるのである。

というのも、離反以前ヴァーグナーと亡父とはなにほどこであれ、ニーチェの手によつて同一化されていたと考えられるからである。「父」はヴァーグナーに吸収されていたといつてもよい。一八六八年秋ニーチェはヴァーグナー

音楽に帰依するとともに音楽家本人とも知己になる機会を得、以降両者の親密度は急速に増大してゆく。その半年後の一八六九年四月ニーチェはバーゼル大学に職を得るのだが、この頃から、同大学に提出した履歴書などを除いて、父に言及した文章は見られなくなる。とくに就職後三年あまりは、書簡においてすら父を話題に出すことがない。つねに「父」の欠落に苦悩してきたであろうニーチェが、である。ニーチェはヴァーグナーに「父」を、少なくとも「父」の代替を見いだした。ヴァーグナーは亡父と同じ一八一三年生まれであった。この父とヴァーグナーの同一化が一八七五年以降の亀裂の進展によって、剥離してゆく。この剥離の開始と完了の軌跡が、一八七五年と一八七八年における「父の警告する声」や「父の諫める声」の想起となつて現れた。七年から最長一〇年の間、ヴァーグナーは「父」の欠落を埋めてくれたが、もはやそれは許されない。

「父」の「声」は「回想」において「ダイモニオン」になぞらえられていた。いうまでもなく、これはソクラテスのダイモニオンを言う。ソクラテスが人生の重大事につつかる度に、自分のなそうとすることが不適當である場合つねにストップをかけてきたという、あの、一種の「守護霊」である。「回想」はこの「ダイモニオン」のことを記したすぐあと、こう述べている。「ソクラテスの弁明を内心動かされながら読み解説した。「クセノポンの」回想録もうれしい。これをわたしは文献学者たちよりもよく理解できると思う。」(8[三])

実は、一八七八年の夏学期ニーチェはバーゼル大学の講義にプラトンの『ソクラテスの弁明』を取り上げている。残念ながらその講義ノートは初回分(の一部分)わずか一頁ほどしか残されていない(Hf. S. 552a)が、こうした事情も「父の警告の声」を「ダイモニオン」に比定させるのに一役かったことであろう。(ちなみに、「回想」という題名はクセノポンの書『ソクラテスの思い出』『回想』に由来している。)この比定がニーチェにとって真性の

ものであるとするなら、「父」の「声」は「ダイモニオン」の「警告」として、今行っていることないし行おうと
 していることを諫止するものであろう。少年時代にもそうした諫止は繰り返されたにせよ、いまの文脈で言うなら、
 つまり、一八七五―七八年におけるニーチュエからするなら、その諫止の向かう先はなにより、ヴァーグナーとの関
 係でしかありえないだろう。「父」はヴァーグナーとの一体化から逃れ、いまや息子にヴァーグナー関係の破棄を
 迫るものとなった。特に、関係の破綻が後戻りできなくなった七八年の「回想」の断章は、その「声」が現在の
 ものでもありうるような文体となっている。息子が六歳から一〇歳過ぎまで耳にしていた「父の諫める声」が三〇
 代半ばとなった息子に再度、まさに人生のクリティカルな地点で今後の行く末に方向性を示すものとして回帰して
 きた、少なくともそういうものとして、息子によって再解釈された。一方で、ヴァーグナーとの蜜月時代の喪失の
 痛みに涙しながら、である。(そのときには蜜月時代が幼年期の幸福と二重写しになっていただろう。)

こうしてヴァーグナーと「父」の同一化は解消された。とすると、ヴァーグナーから解放された「父」はどんな
 のだろうか。ヴァーグナーと同一化される以前、なканずく、息子がキリスト教信仰を失う二十歳以前には、亡
 父は息子にとって基本的に、息子自身の崇敬や思慕の対象であり、同一化の対象であった。それが今や、「父」は
 その帰属先を奪われた以上、息子の方に舞い戻ってくるしかないだろう。そのとき息子の思想的営為も一部分「父」
 からの「帰結」の産物として観念されることになる。一八八四年九月一四日ニーチュエはオーヴァーベック宛に書い
 ている。「他人の苦しみを過大視するというのが、わたしの永遠に繰り返された失策です。幼年期以来「同情にわ
 たしの最大の危険が存する」という命題は再三確証されてきました。(ひょっとしたら、わたしの父の並はずれた
 性質の悪しき帰結かもしれません。父を知る人は皆、父を「人間」というよりは「天使」に数え入れていたもので

す。) 同情にはさんざんひどい目に遭いましたので、それでわたしが同情の評価を理論的に大変興味深い形で変更するよう駆り立てられたのも、もつともなことでしょう。」

だが、一八七八年以降亡父との関係で最も重要な素因となったのは、ニーチェの病気体験である。若い頃から様々な病気に悩まされていたニーチェではあったが、七〇年代後半以降病状はすぐれず、とりわけ一八七九年から八〇年にかけて健康状態は最悪化した。それは後年『この人を見よ』でみずから「わが活力の最低点」とか「わがミニム」(VI, S.262)と形容するほどであった。バーゼル大学を辞職したのも七九年の六月である。失明を心配されるほどの眼痛、偏頭痛、嘔吐など消化器官の衰弱……。としたら、三六歳で死去した父のことに思いが馳せられないわけがない。一八七九年は息子自身も同年齢に近づいていたのだから、なおさらである。「父は線が細く人好きがし病気がちで、まるで通過することだけが定めの人物であるかのようだった——人生そのものというよりは人生のやさしい思い出であった。」(Ibid.) 父は発病後失明し、激しい苦痛に苛まれ続け、一年近くの闘病生活の果てに息を引き取った。しかし、息子の方の最悪の病状は一八八二年頃になるとある程度緩和される(あくまで「ある程度」であって、病気はそれ以降も何度となくぶり返す)。「父」は乗り越えられた——のだろうか。

いや、「父」は単純に乗り越えられただけではない。「父」は、いわば病気の権化としての「父」はまた、息子のうちに取り込まれた、まさに取り込まれるという形で乗り越えられたのである。精神が闇に沈み込む直前の一八八八年ニーチェは『この人を見よ』の本文を次のように開始する。「わたしという生存の幸福、ひよつとしたら無比性はその宿命のうち存している。謎の形でこの宿命を言い表してみるなら、わたしはわたしの父としてはすでに死んでおり、わたしの母としてはいまだ生きながらえ歳をとりつづけている。」(VI, S.262)

これは考えてみれば、随分人を喰った「謎」である。というのも、事実関係として「わたしの父」はとっくに死んでいるし、「わたしの母」はまだ健在である（一八九七年まで生き延びる）のは平明な事実なのだから。言ってみれば、これはわざわざ「謎」と銘打たれることによって「謎」となる文章である。とするなら、この「謎」とも見えない「謎」の解決はどうなるのか。「わたしの父」とは厳密には、実在の父そのものというよりは、「わたし」によって同一化されつつ「わたし」のうちに取り込まれた限りの「わたしの父」なのである。なぜなら、「わたしは死んだ。「父」とは「デカダン」の、したがって生命力の高貴な低下の、典型である。「天使」のような人好きのする善良さゆえの虚弱さ——「わたし」が「父」から受け継いだのはこれである。デカダンスの酸いも甘いも味わい尽くした者として、「わたし」は死んだ。「わたしの父」としての死とはデカダンスの克服にはかならない。

「父」とはなにより全身的虚弱性の典型である。ニーチェは（『この人を見よ』で）自分の場合たとえば眼病などが原因となって全身衰弱が発生したのではなく、その逆であることを強調する。それは、病弱であることの高貴な精神性を、つまりは「父」からの「遺産＝遺伝」をそのものとして守護し抜こうとするからである。微妙なニュアンスに対する鋭敏な感受能力が育まれたものこの虚弱性のゆえである。また、発病の苦悶のさなか、知性の明澄は減退するどころか、健康時以上に頭脳は冷静に冴えわたっていたし、「我が人生の根本的非理性」というべき「理想主義」について考えを改めさせ、理性をもたらししてくれたのも病気であった（*Ibid.*: S. 383-4, 384）。他方、ヴァーグナーとの関係が風雲急を告げ始めたとき、自分をこの関係の泥沼から「ゆっくりと」解放してくれたのも、同じ、一八七〇年代後半における発病、「わたしの父の側からの困った遺産である」「天逝の定め」（*Ibid.*: S. 374）であっ

たと指摘する。(まさにその時期、病気の初期と最悪化の直前とに、あの「ダイモニオン」の「声」が心中響き渡った。)「このような父をもったことを、わたしは大いなる特権と見なしている。」(S₂₈)

しかるに一八八八年末のニーチェの自己診断では、このデカダンスは克服され(あえて言うなら、「揚棄」され)、「大いなる健康」が実現された。「父」との同一化はあくまで半分に留まり、そのおかげで(受け継ぐべき遺産は確保しながら)今やそこから脱出することに成功した。ただし、これはこの時期のニーチェの異様に高揚した判断にすぎない。親子関係とはある意味で、子にとって追い越し不可能な関係である。親からの「影響」が(子の)自己のアイデンティティ形成の一要素となるからである。キルケゴールの言うように、自己とは自己関係にほかならないとすれば、親は遺伝やその他の「影響」という形で、はじめから自己の核の一部を構成しており、その意味で親子関係とはとりもなおさず自己関係である以上、親への関わり方の如何が自己関係としての自己それ自身の内実を決定せずにおかないだろう。

息子ニーチェも「父」との関係に合理化の区切りを付け得たと思った瞬間、数週間後には、「父」の宿命であった精神の闇に呑み込まれていった。とはいえ、親子関係になんらかの様式化を施そうという「欲望」は人間誰しもなにかしら感じ取つていよう。ニーチェは思想家としてのその生涯の最後に、みずからの思想の重要な要素である「病氣」と「健康」という主題との相互作用において、父子関係を自己関係として思想的に鍛え上げ変奏しようとしたのである。

- (1) その代表的なものは、なんといっても、総計二五〇〇頁にも及ぶ以下の研究であろう(ただし、本稿作成にあたって十分な参照はできなかった)。Hermann Josef Schmidt: *Nietzsche Absconditus oder Spurenlesen bei Nietzsche*, 4 Bände, BDK Verlag, 1990-1994. なお、以下ニーチェからの引用は、つわゆる KGB (*Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe*, de Gruyter)における慣用に従っている。
- (2) 自伝の執筆と中止の意味については、須藤訓任『ニーチェ 永劫回帰という迷宮』(講談社、一九九九年)第一章「ニーチェの「始まり」」を参照。
- (3) 白水社版『ニーチェ全集』第五卷(第一期)四九九頁参照。ただし、アンリ四世の暗殺者の名とされる最後の「ラヴァヤック」は原稿の読みからして不確定であり、ニーチェの真意は不明のようである。またこの遺稿断片については、モンチナリが事実関係について詳しい考証を試みている。Mazzino Montinari: *Nietzsches Kindheitserinnerungen aus den Jahren 1875 bis 1879*, in derselbe: *Nietzsche lesen*, Berlin・New York, 1982.
- (4) なお、J・ケーラーは『ニーチェ伝 ツァラトウストラの秘密』(青土社、二〇〇九)第六章で「回想」に関して総体的な考察を試みている。

(文学研究科教授)

RESÜMEE

Die warnende Stimme des Dämonions — Nietzsche und sein Vater

Norihide SUTO

Nietzsches Vater war konstitutionell gebrechlich und starb als der Sohn 5 Jahre alt war. In diesem Aufsatz versucht der Verfasser aufzuklären, wie Nietzsche als Denker sich Bilder von seinem verstorbenen Vater zu machen bemüht war. Seit dem Tod des Vaters hatte Nietzsche sich mit ihm identifiziert, bis er im Alter von 24 Jahren Richard Wagner im Herbst 1868 begegnete und den Ersatz des verlorenen Vaters in ihm fand. Nach 7 Jahren aber in 1875 erinnerte er sich plötzlich „der mahnen- den Stimme des Vaters“ mit anderen kindlichen glücklichen Episoden und diese Erinnerung wiederholte sich noch einmal in 1878: der selige Vater hatte seinem Sohn als kleinem Kind die warnenden Gehörhalluzinationen (?) wie sokratisches Dämonion gegeben. Zwischen 1875 und 1878 sind Nietzsches enge Beziehungen mit Wagner wegen ihrer beiden philosophischen Veränderungen zusammengebrochen. Die Wiedererweckung der Stimme des Vaters als Dämonions gab also dem Sohn das Vorzeichen dieses Zusammenbrechens. Dann 1879-1880 litt Nietzsche tief an der schweren Krankheit. Im letzten Jahr seines Lebens als Denkers (1888) wusste er diese Krankheit als das erbliche Geschenk seines Vaters zu verstehen: es seien der Vater und seine gebrechliche Vornehmheit, die ihn von Wagner befreit haben. Es gelang ihm, den Stellenwert des seligen Vaters und seiner Vererbung innerhalb der Ganzheit seiner eigenen Philosophie fruchtbringenderweise erneut zu bestimmen. Sofort danach aber verfiel er in Wahnsinn.

キーワード：父、同一化、病気、回想、ヴァーグナー